| 段落 | 文 | 頁 | 行 | 原文 | 神山訳 | 寺沢訳 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 132 | 6 | Anmerkung. | 註解 | 注解 |
| 388 | 1 | | 7<br>8<br>9<br>10 | Im qualitativen Seyn erschien die Grenze zuerst als ein solches, das vom Insichseyn des Etwas unterschieden, als ein äusserliches ist, wogegen das Etwas selbst gleichgültig ist. | 限界は、質の存在においては、まず第一に、《〈なにものか〉が〈みずからの内にあること〉とは区別されたもの》として、つまり《〈なにものか〉それ自身が無関心を装う外面的なもの》として、現象した。 | 質的存在においては、限界はまず、或るものの自己内存在から区別されており・外的なものとしてあり・そして或るもの自身はこれに対して無関心的であるような、そういったものとして現われた。 |
| | 2 | | 10<br>11<br>12<br>13 | Aber diese Aeusserlichkeit der Grenze hob sich sogleich auf, und die Grenze zeigte sich als eins mit dem Insichseyn des Etwas, und als Bestimmtheit. | しかし、限界のこうした外面態は、ただちに廃棄されたし、また、限界は、《〈なにものか〉が〈みずからの内にあること〉と一致するもの》として、かつ規定態として、明瞭になった。 | しかし限界のこの外面性は直ちに揚棄された、そして限界は或るものの自己内存在と一体のものとして・また規定態として示された。 |
| | 3 | | 13<br>14<br>15<br>16<br>17<br>18 | Aber jene Grenze war noch nicht die quantitative Grenze; denn das Insichseyn des Etwas ist nur erst unmittelbar, welchem das Andere sich gegenüber erhält; es ist noch nicht das unendliche Zurückgekehrtseyn der Quantität, in welchem das Andersseyn sich an und für sich selbst aufgehoben hat. | だが、そうした限界は、まだ量の限界ではなかった。というのも、《〈なにものか〉が〈みずからの内にあること〉》は、結局のところ直接的であって、これに対向して〈他のもの〉が維持されるからである。それに、《〈なにものか〉が〈みずからの内にあること〉》は、まだ、〈他であること〉がそれ自体でもそれだけで独立してもそれ自身廃棄されてしまう《量という〈無限なかたちで還帰したもの〉》ではないからである。 | しかしそのような限界はまだ量的限界ではなかった。というのは或るものの自己内存在はただようやく直接的であるにすぎず、他者がこの或るものに対立して保持されているからである。この自己内存在はまだ、そこでは他在が絶対的かつ究極的に揚棄されてしまっている・量〔という自己〕へと無限に還帰してしまっている存在ではない。 |
| | 4 | | 18<br>19 | Am Etwas ist daher seine Grenze wesentlich seine Bestimmtheit. | だから、〈なにものか〉のもとでは、〈なにものか〉の限界は、本質的に〈なにものか〉の規定態なのである。 | したがって或るもののもとではそれの限界は本質的にそれの規定態である。 |
| 389 | 1 | | 20<br>21<br>22<br>23 | Wenn wir sonach unter Grenze die quantitative Grenze verstehen, und z. B. ein Acker seine Grenze, nemlich die quantitative verändert, so bleibt er Acker vor wie nach. | 以上によれば、われわれが限界ということで量の限界を悟性的に理解するなら、たとえば、耕地がその限界、すなわちその量の限界を変化させるとしても、この耕地は、あいかわらず耕地であり続ける。 | それだから、限界〔という表現〕のもとに量的限界が理解されている場合には、例えば田畑がその限界を・すなわち量的限界を変化させても、それは相変らず田畑でありつづける。 |
| | 2 | | 23<br>24 | Wenn aber seine qualitative Grenze verändert wird, so ist diß seine Bestimmtheit, wodurch er | しかし、耕地がもつ質の限界を変化させるなら、これは耕地が耕地であるゆえん | しかしその質的限界が変化するならば、これ〔質的限界〕は田畑がよってもって |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 25 | Acker ist, und er wird Wiese, Wald u. s. f. | の耕地の規定態であり、そうなれば、耕地は、牧草地とか森などとかになる。 | 田畑であるゆえんの田畑の規定態であり、こうして田畑は牧場・森等々になる。 |
| | 3 | | 25<br>26<br>27<br>28 | — Ein<br>Roth, das intensiver oder schwächer ist, ist immer Roth;<br>wenn es aber seine Qualität ändert[1], so hörte es auf<br>Roth zu seyn; es würde Blau u. s. f. | ——〈赤〉は、よく濃くなったりより薄くなったりしても、いつだって〈赤〉である。しかし、〈赤〉がみずからの質を変えるなら、〈赤〉は〈赤〉であることをやめる。〈赤〉は、〈青〉などになったりするだろう。 | ——赤は、より濃くてもより薄くても、やはり赤であるが、それがその質を変えれば、それは赤であることを止める。それは青等々になるであろう。 |
| | 4 | | 28<br>29<br>30<br>31<br>32 | — Der wahre<br>und bestimmte Begriff der Größe, wie er sich hier erge-<br>ben hat, daß ein Bleibendes zu Grunde liegt, *das ge-*<br>*gen die Bestimmtheit, die es hat, gleichgül-*<br>*tig ist*, ergibt sich an jedem andern Beyspiel. | ——〈大きさ〉という規定された真の概念は、ここで判明したように、《〈永続的なもの（あり続けるもの）〉が根柢にあり、【この〈永続的なもの〉がもつ規定態に対して〈永続的なもの〉が無関心である】》ということである。こうした概念は、ほかのどの例でも判明する。 | ——こに明らかにされたような大きさの真の規定された概念、すなわち、或るものがもっている規定態に対して無関心的であるところの存続するものが根底に存するということは、それぞれの他の例についても明らかになるのである。 |
| 390 | 1 | 313 | 1<br>2 | Gewöhnlich wird eine Größe definirt, als etwas,<br>das sich *vermehren* oder *vermindern* läßt. | 通常、ある〈大きさ〉は、《【増加】させられたり【減少】させられたりするなにかだ》と定義される。 | 大きさは通常、自己を増大させまたは減小させる或るものであると定義される。 |
| | 2 | | 2<br>3<br>4<br>5<br>6 | Ver-<br>mehren aber heißt, etwas mehr *groß*, vermindern<br>weniger *groß* machen, und das Mehr in *mehr*<br>groß, und das Weniger in *weniger* groß — löst<br>sich wieder so auf. | しかし、〈増加する〉とは、いくらか《より多く【大きく】する》ということであり、〈減少する〉とは、いくらか《より少なく【大きく】する》ということである。そうなれば、それぞれは、《【より多く】大きい》の〈より多く〉と、《【より少なく】大きい》の〈より少ない〉ということになる。——だから、〈増加する〉とか〈減少する〉とかは、反対に消去される。 | しかし「増大させる」とは或るものをより大きくすることであり、「減小させる」とはより大きくなくすることである、そして「より大きく」における「より」と「より大きくなく」における「より……なく」が〔さらに定義されなければならなくなるので〕——〔「増大させる」と「減小させる」とが解体されたのと〕同じようにふたたび解体される。 |
| | 3 | | 6<br>7<br>8 | Es liegt darin ein *Unterschied*<br>der Größe überhaupt von ihr selbst, und die Größe<br>wäre also das, dessen Größe sich verändern läßt. | ここには、《一般にいう〈大きさ〉》と《〈大きさ〉それ自身》との【区別】がある。もしそうだとすれば、〈大きさ〉とは、《〈大きさ〉が変化させられるもののほう》ではないのか（いや、そうではない）。 | この定義のうちには〔定義されるべきである〕大きさ一般と〔増大したり減小したりするとされている当のものである〕大きさそのものとの区別が含まれており、こうして大きさとはその大きさを変化させるものだということになるであろ |

[1] GW änderte

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | う。 |
| | 4 | | 9<br>10<br>11 | Die Definition zeigt sich deßwegen als ungeschikt, weil in ihr diejenige Bestimmung selbst gebraucht wird, welche definirt werden sollte. | さきほどの定義は、定義されるべきものと同じ規定それ自身がそこで使われるから、拙いものであることが明瞭である。 | この定義は、定義されるべき規定そのものがそのなかで使用されているから、不適当なものであることがわかるのである。 |
| | 5 | | 11<br>12<br>13<br>14<br>15<br>16 | Es ist jedoch in diesem unvollkommenen Ausdruck das Hauptmoment nicht zu verkennen, worauf es ankommt; nemlich die Gleichgültigkeit der Veränderung, daß in ihrem Begriff selbst ihr eigenes Mehr Minder liegt; ihre Gleichgültigkeit gegen sich selbst. | しかしながら、こうした不完全な表現のかたちながらも、問題となっている主要モメントを見損なうべきではない。すなわち、〈大きさ〉の概念それ自身は、《〈大きさ〉独自の〈より多い〉〈より少ない〉がある》という変化に〈無関心〉であり、つまり、〈大きさ〉がみずから自身に対して〈無関心〉なのである。 | けれどもこの不完全な表現のなかでも、これこそが重要である主要な契機を見おとすべきではない。〔主要な契機とは〕すなわち、大きさの概念そのもののうちにその固有の「より」と「より……なく」とが含まれているという変化の無関心性・大きさの自己自身に対する無関心性〔である〕。 |

平成 27 年度跡見学園女子大学特別研究助成費による成果の一部（Ver.1, 2017/5/15. Copyright© KAMIYAMA, Nobuhiro）